

書評

李建志『日韓ナショナリズムの解体

—「複数のアイデンティティ」を生きる思想』（筑摩書房、2008）

中村八重

本書はタイトルの通り、日本と韓国のナショナリズムの双方を両断して批判する斬新な手法で書かれている。しかし、単なるナショナリズム批判ではない。マジョリティとマイノリティの関係論とっていいかもしれない。日本と韓国双方のナショナリズムの構造にある、マジョリティによって規定されてしまうマイノリティという関係性を多様な事例から批判し、「複数のアイデンティティ」を持つことを認める、住みやすい社会をつくろうと提言するものである。

本書の構成をおおまかに述べると次の通りである。序章「複数のアイデンティティを持つということ」で、本書での概念が説明される。第1章「日本の「内地」という政治」では、地理的な条件から「切り取られる」沖縄と北海道が取り上げられる。第2章「韓国ナショナリズムと「故地意識」」では、韓国のナショナリズムとその批判のありかたがたどられる。第3章「日韓のマイノリティから見た「切り取り」の様相」では、日本と韓国のマイノリティを対比的に論じ、病気や障害を持った人々についても考察される。終章「名前とアイデンティティ」では、小笠原を事例に名前とアイデンティティについて論じられ、「複数のアイデンティティを持つこと」がどういうことかまとめるという構成になっている。

本書では多様なマイノリティの事例が取り上げられる。日本におけるいわゆるハーフ、沖縄、北海道、在日朝鮮人、小笠原西欧系島民、八重山台湾系移民、そして韓国におけるいわゆる華僑、僑胞、ハンセン病患者、障害者などがつぎつぎと議論されていく。素材の種類が多いだけでなく、その引用先

も著者がフィールドワークで得た当事者の言葉から、論文や小説などの文献、テレビ番組、落語などに至るまで多彩だ。そのぶん、議論も幅広く多岐にわたって展開される。簡単にまとめることを拒絶する内容の豊富さである。

しかし、決してぶれないのは、「無意識で善意」の差別を照らし出し、特殊化されるマイノリティの「無念な気持ち、心の傷とはなにか、そうしてどうすればそのような立場のひとを傷つけない社会になるかを考える」(21 頁)という痛切なまでの姿勢である。

筆者が問題にするキーワードをふたつあげるとすれば、「無意識で善意のナショナリズム」と、「切り取る」だ。マイノリティを特殊化する、つまり「切り取る」のはマジョリティであり、マジョリティはマイノリティを切り取ることでしか成立し得ない。そして、その際使われるのが「無意識で善意のナショナリズム」である。

例えば、「日本人は個人プレーが苦手」といった、しばしばスポーツ番組でみられるような「謙虚さ」も、「無意識で善意のナショナリズム」であり、外国人にたいする単純化したイメージと同根なのだ。「ハーフ」を「ダブル」と読み替える善意もまた、純血を前提とした「善意のナショナリズム」による「切り取り」である。

マスコミで「かわいそうなひと」の「感動秘話」が消費されていることにも言及されている。これは、「他者と向き合うようなポーズ」をとりながら現実にはしんどい部分をすべて割愛した「向き合わないための技術」だとの指摘は痛烈だ。

著者は現在でも沖縄や北海道で使われている「内地」という言葉は、恣意的に切り取られてきたマイノリティの内面化であると分析する。沖縄や北海道に特殊性を与える「善意」の視線は、彼らを植民地を失った日本の非「内地」として機能させている「切り取り」なのだとの指摘は、人類学者の他者表象の問題としても考えさせられた。

韓国に対するナショナリズム批判も鋭い。例えば韓国で提唱されているコリアンネットワークという思想は、在外僑胞を利用した「大韓民国主義」であり「抱きしめて切り取る」、「無意識の善意のナショナリズム」そのものだと批判する。

こうした日韓をまたぐ鋭いナショナリズム批判は、著者が「在日朝鮮人」とよばれるマイノリティに属する存在であるからこそ可能で、リアリティをもって読む者に迫る、と評するのは短絡的だろう。

本書は、前著『朝鮮近代文学とナショナリズム―「抵抗のナショナリズム」批判』（2007年、作品社）で論じた、反権力の中に宿る権力すなわち「抵抗のナショナリズム」批判の姿勢を貫いている。日本と韓国のどちらの社会からも切り取られることを拒み、自らもマイノリティの「被害者性」の中に安住しない立場だ。

本来マジョリティの中にもマイノリティ性があり、反対にマイノリティもマジョリティ性をもつ複雑な関係だからこそ、差別や均質化の暴力を告発し、複数のアイデンティティを持つことを提案するのだ。本書全体から感じられる論理的だが熱い批判力は、著者がいうような「肌で感じた」、社会を変えなければならぬという思いの表れだろう。もしこれを「在日」の枠を通してだけ見るのなら、それこそが善意による「切り取り」に他ならないだろう。

本書は事例や分析が多様であるため、各事例についてもっと詳しく知りたいと感じてしまうことは否めない。ひとつひとつの問題の深淵を覗く前に次の話題に移っていく感がある。例えば、終章では小笠原での聞き取りに基づいて、強要や変更を通じて固有性を表してこなかった名前について論じられているが、名前を変えた／変えさせられた個人の経験自体は詳しく述べられていない。名前とアイデンティティの関係は興味をそそられるが、詳しく論じられないまま、「複数のアイデンティティ」を持とうとの提案にスライドしてまとめられているように感じる。

さらにいえば、マイノリティの困難が「名前の数だけアイデンティティを持っている／持たされている」（222頁）ことであったのに、アイデンティティを複数持つことの困難には触れられていない。そのため、本書の提言である「複数のアイデンティティを持つこと」が、理想に過ぎないのではないかという印象を抱かせるのは否めない。

とはいえ、一般を対象にした「無意識で善意のナショナリズム」に対する告発と、「複数のアイデンティティ」を提案するという意図では本書は成功していると思う。自身が複数のアイデンティティを持つと認識できるときに、

他者のアイデンティティをも認め、他者を切り取る力を批判的に省みることができる。

本書で展開される議論が、その他の障害者や性的マイノリティなどにも広がっていけば、著者のいう「最小公倍数」の社会実現にさらに近づいていくのではないだろうか。多くの人に読んでもらいたい本だ。

参考文献

李建志 2007 『朝鮮近代文学とナショナリズム―「抵抗のナショナリズム」批判』 作品社。

(yaena@nifty.com)